

資料紹介

動物形内蔵土器

ー近野遺跡の追加資料ー

成 田 滋 彦

1 はじめに

平成13年に青森県埋蔵文化財調査センターにおいて、過去の遺物の整理及び収納作業を行ったところ、偶然に土器の破片の中から発見したものである。

遺物の注記では、74・06・29と注記があり、注記から昭和49年度の近野遺跡の第二次調査であり、私も参加して調査を行っていた。何故に、このような貴重な資料を見落とし、報告書に記載しなかったかについては、発見した遺物が掲載外の一括資料として収納されており、当時は動物と理解せず壺形土器の把手として理解し、掲載外に分類してしまったかもしれない。

とにかく、本県では出土例の少ない動物形内蔵土器(藤沼1997)であり、今回新たに図を載せ記載する事とする。

2 遺物の説明

出土状態・時期 注記では、BF-210表土と記載している。遺構外の出土で、表土のため他の遺物との共伴関係は不明であるが、製作等から判断すると縄文時代後期の十腰内Ⅰ式と思われる。

土器 器厚は0.7cmと薄く、胎土には細砂粒を含んでいる。色調は器内面が5Hue10YR にぶい黄橙色6/3、器外面が5Hue10YR にぶい黄褐色5/3であり、器内面は動物と同じ明るい色調を呈する。焼成は、ほぼ良好であり精製土器の類と考えられる。

動物 形態は、四肢をひろげ貼り付いている。指先部は明確でなく、広がった状態である。頭・尾部は突起状態で明確には表現していない。腹部は、やや中央部でえぐれ、背部は斜位に製作している。

文様は、直径2mmの円形刺突を施文しており、背部に一行、側縁部に各々一行に規則的に施文している。この様に全面に円形刺突を施文する例は、六ヶ所村上尾駸(2)遺跡(遠藤1988)にもみられる。全体の形状から表現を観察すると、頭を下げ尾を上げた威嚇のポーズにも見えるし、頭部を上げ尾を下げた従順なポーズにも見え判断に悩む資料である。

3 おわりに

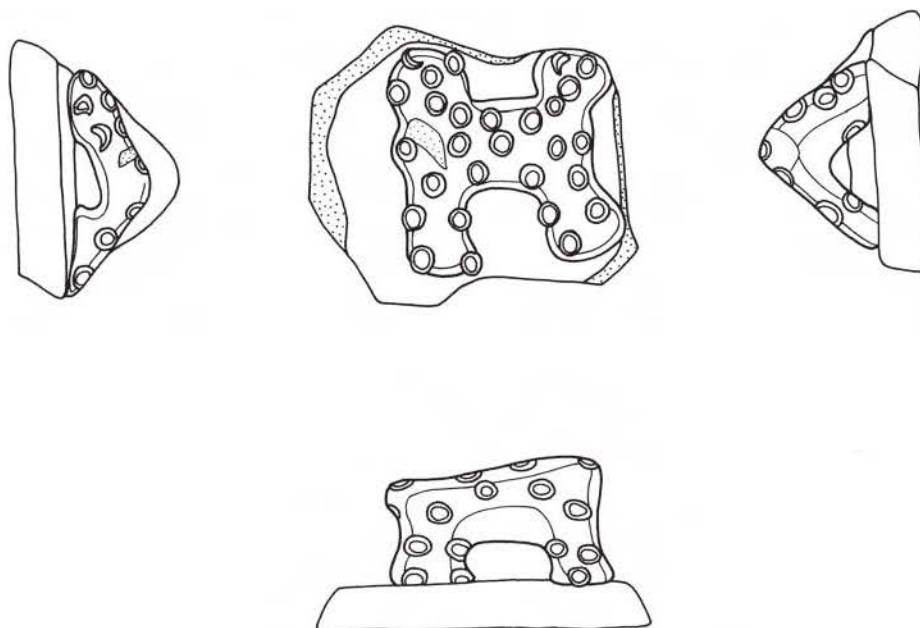
今後は、整理のさいの遺物の選別を反省し、本資料も含めて動物形内蔵土器を検討していきたい。

参考文献

- 遠藤 正夫(1988)「上尾駸(2)遺跡」青森県埋蔵文化財調査報告 第115集 青森県教育委員会
藤沼 邦彦(1997)「縄文の土偶」 講談社



遺跡位置図



動物計測値

全長2.7cm・幅3.0cm・高さ1.7cm

縮尺 1分の1

図 動物形内蔵土器